

私の終戦前後

星野邦夫（フィリピン在住） 一九三三年生

一・終戦前

昭和二十年春、父は四十五才湖北郵便局長、私は十二才湖北国民学校六年生。長兄は朝鮮へ、次兄は台湾に出征し、長姉は近くの布佐台気象観測所に勤務していた。

父は黄色い戦闘帽をかぶり、カーキ色の国民服に身をかためて郵便局に勤務するほか防空演習に狩り出された。演習から帰ってきて、「竹槍で戦車に突っ込む練習をした」とぼやいた。校庭には竹の戦車が出来ていた。

食糧難もひどくなった。湖北村は農村だったのに、九十九里から上陸する米軍に備えて兵隊が大勢駐留するようになったので、米飯は食べられなくなった。学校の弁当はサツマイモとなり、朝夕はすいとん入りのお粥になった。やがて弁当に持って行くサツマイモもなくなったので、昼は家に帰ってお粥を食べることになった。

家族が台所の板の間に座り、サツマイモの茎が浮いた水っぽいお粥を食べていたときのことである。一杯では足りなかった私が「おかわり」と言ったら、母が自分の食べかけの茶碗を差し出して、「これをやる」と言った。

何故母が私にだけくれたのか？何故私が姉弟に分けてやらなかったのか？分からない。狭い台所のじめじめした暗い板の間に座って痩せさらばえた親子が乏しい食べ物を食べているシーンを思い出すと、私は胸がせまって泣き出したくなる。

二・終戦後

終戦の詔勅は自宅で聞いた。郵便局の事務室に隣り合わせの居間に父母と事務員の田口美代ちゃんと一才上の姉と私の五人が直立してラジオから流れてくる玉音放送を聴いた。私は何のことか分からなかったが、父母と美代ちゃんが謹聴しているの、重大なことと悟った。終わってから父がポツンと言った。「戦争が終わった」

次の日、小学校に駐屯している兵隊の隊長が自決したと聞いた。

終戦の年の九月に新学期が始まって登校すると、駐屯していた兵隊はいなくなり、校庭もきれいに片付いていた。

教室に入ったら黒板いっぱい白墨で縦書きの文字が書いてあった。それは終戦の翌日に自決した隊長が六年生男子ならば理解してくれるかと思つて書き残した遺書であった。私はノートに書き写して宝物のように持っていたが、いつしかなくしてしまった。しかし、書いてあったことの大略は忘れない。白墨の筆勢も覚えている。人がいのちをかけて書き残した文章を誰も覚えていなくては申し訳ないという気持があつたからである。

それは次のようなことであつた。

先ず「神勅」^{しんちよく}と書き、次の行から数行は国史で習つた神勅が書かれてあつた。

「豊葦原の瑞穂の国は我が産みの子の治むべき地なり」つまり日本国は天照大神^{注150}を祖先とする天孫民族^{注152}が統治する国であると宣言している。それから途中は忘れたが最後は、「さきくませ、天つひつぎの栄えまさんことは天地と共に限りなくあらんことを」で終わっている。天照大神直系の天皇家は天地の続く限り栄えると予言している。

この神勅は何処からかやって来た天孫民族が先住民族を征服するために出撃しようとしたとき、神様が下さった餞けの言葉と伝えられる。本当のものか、後世になつて作られたものか分からない。しかし、神勅を信じてたくさんの日本人が死んだ。遺書を書いた隊長も文字通りに信じていたのだろう。

隊長は神勅を書き終わったあと、一行あけて書き続けた。それは美文調で、一語一語覚えていないが、大体次のような内容であった。

「君たちは神勅を信じるか？私は信じる。神様の子孫である天皇が統治する日本は神の国である。だから私は絶対に滅亡しないと信じる。『神州不滅』だ。不運なことに日本は戦争に敗れた。私は死んで鬼となって日本を守る。『護国の尖兵たらん』」

遺書の書かれた黒板に向かって白昼夢のような思いをさせていたとき、担任の浅野徹先生が入ってきた。油の切れた頭髪を伸ばして逆立て、日焼けしたツヤのない顔を不健康そうにむくませ、丸首半袖白シャツから太い腕を出した先生は疲れ切った表情をしていた。のっそりと教壇にあがると黒板を一瞥してから黒板消しを手にして遺書を消していった。全部文字が消え、白墨のあとが残っていないことを確かめると、先生は口をへの字に結んで、黒板の真ん中に、「矜持^{きょうじ}」と大書した。それから私たちの顔をひとわり見回して、「これから君たちに必要なのはこれだ」と静かに言った。今まで見たことのない文字だった。先生は声を出して、「きょうじ」と読んだ。どういう意味なのかは教えなかった。遺書の「神州不滅」と浅野先生の「矜持」が私に取って、忘れられない文字となった。

(了)

美しい街を二度と焦土にしてはならない

本田 弘（布佐平和台在住）一九三五年生

日本は、第二次世界大戦の終盤、米国の戦略爆撃機（B 29）により、東京、名古屋などの大都市から中小都市まで数多くの空襲を受け、焦土と化した。

当時、私は十歳で愛知県にある人口十万人ほどの大都市に住んでいた。ラジオ放送が突然中断し、「ビビー、ビビー」と警笛が鳴った後、「東海軍管区司令部発表、愛知県、岐阜県、三重県および静岡県、空襲警報発令」と報じた。これを何度となく聞いた。以前は「横須賀鎮守府西管区、空襲警報発令」様式であったが、本土防衛の主管が海軍から陸軍に移り、管轄区域名が変わった。

名古屋は、日本の航空機生産の一大拠点となっていたので、徹底的に攻撃された。B 29は、名古屋を空襲した後、我々の上空一万メートルを何事もなかったかのように、何十機あるいは何百機が白昼整然と編隊を組んで通り過ぎて行った。この飛行編隊はしばしば、紺碧の空に幾く条もの白い飛行機雲を棚引かせ、敵ながら見事な光景を呈した。これを日本の高射砲が射撃したが、弾はB 29にまで届かなかった。また、夜間の空襲では、名古屋市街の赤く帯状になって燃えている様子が、四十キロも離れた我々の街から鮮明に目撃された。

昭和二十年七月には、我々の街も多数のB 29によって空襲を受けた。私の家族は何故か逃げる途中で別れ別れになり、それぞれが適当な場所に避難した。空襲は、市街地の周辺地区から中心部に向かって行われ、それとともに次第に激しさを

増していった。焼夷弾の風を切って落下する音、地上で炸裂する音や地響きが引つ切りなしに聞こえてきた。また、夜空は赤く染まり、中空を無数の火の粉がまるで吹雪のように絶え間なく流れて行つた。まんじりともしないで、ひたすら敵機の去るのを待った。やがて空襲も終わり、我々は家に戻つた。幸いなことに、私の家族も家も無事であつた。しかし、近くの民家や工場の建物、学校などが点々と被災した。

この空襲では大型と小型の二種類の油脂焼夷弾が使用されたが、大型のものは投下数が少なかった。油脂焼夷弾は、木造家屋からなる市街地を焼き払うために開発されたもので、日本の都市を廃墟にするのに最も適した爆撃弾であつた。小型焼夷弾（長さ五十センチメートル程度）は、現在のクラスター爆弾の原型のようで、数十個からなる焼夷弾の束が落下の途中で分裂し、一つ一つの焼夷弾となつて降り注ぎ、広い範囲で火災を効果的に発生させた。

私は終戦後、遊び半分で不発の小型焼夷弾を何回か分解した。また、容器に入つた発火用黒色火薬の威力を確かめるため、マッチで火を着けるようなこともした。

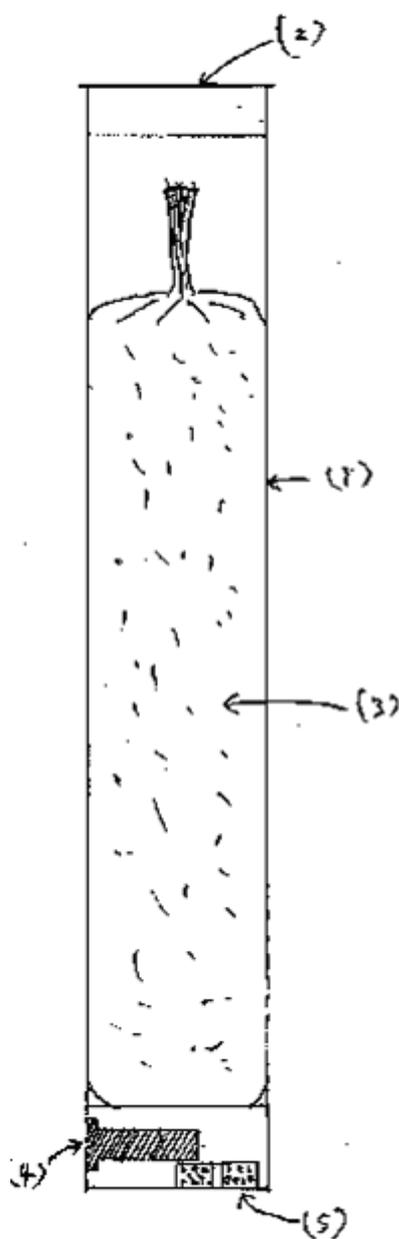
小型焼夷弾は、後図に示すように、大小二つの部屋に区切られた鋼鉄製の六角筒（1）とその上蓋（2）、ガーゼの袋で包まれたゼリー状の油脂（3）、本体に二本のビスで固定された信管（4）、およびセルロイド容器に入れられた二個の黒色火薬（5）からなつており、構造が驚くほど簡単であつた。その他、上蓋にテープ状の長いリボンの付けられているものもあつた。

焼夷弾が地面など堅いものに当たると、その衝撃で下部の小部屋にある信管から火花が出て、近くにある黒色火薬に引火し、それによつて上部の大部屋にある油脂が着火しながら飛び散り、家屋などを燃焼させる。

この小型焼夷弾は、構造が簡単で部品数も少ないので大量生産に適し、B 29による長距離かつ大量輸送と相俟つて、日

本全国の主要都市を灰じんに帰した。

世界のどこかで今日も戦争が行われているが、戦争とは全く悲惨なものである。美しくて平和な我が街を二度と焦土とするようなことがあつてはならない。そのためには、我々は何をすべきであろうか……。



父のシベリヤ捕虜体験

松島 洋（布佐在住）一九三六年生

牡丹江^{注154}・・・それは私にとって父と戦争の記憶の原点ではないか。そんな気が最近のラジオで「牡丹江」という地名を聞いて改めて思いました。

父はシベリヤの捕虜で、終戦三年余を過ぎた昭和二十三年（一九四八年）十二月八日奇しくも太平洋戦争が始まった日に、上野駅の今もあるコンコースの一角に帰ってきました。

出征は開戦前ですから八年の歳月が過ぎていましたし、終戦後二年ほどは生死が不明であり、捕虜は過酷な労働を強いられ容貌も変わっていると聞いていましたから「松島省吾」と書いた^{のぼりばた}幟旗をもって迎えにいきました。

母を家に残し親族七・八人が迎えにいったと思いますが、父を分つたのは叔父一人でした。父が旗に向かって歩いて来たので、これが私の父かと思った私の再会でした。

再会を喜んだ父の一番上の姉の計らいで上野駅の構内のお店で、お茶となにかを食べたように記憶していますが、父はあつという間に平らげてしまったのが強烈な印象でした。

捕虜輸送船はウラジオストクから舞鶴港に着いたこと、服を着替えて何も持たず、二百四十円をもらって上野駅に着くまでに全部買い食いしてしまったことなどを聞きながら家に帰つたのを覚えています。

昭和十六年、私が五歳になった春のしとしとと雨の降る朝、我が家の使用人だった「喜久男兄や」に背負われて表通り（今

の三五六号線）を進み庄右衛門の槐えんじゅの木のある角を曲つて父の出征を見送りにいった情景が私の幼い記憶の一こまにあります。それが父との別れでした。

程なく父は満州の牡丹江にいますということが分かりました。終戦直前の八月九日ソ連軍が国境を破つて侵入してくるまでは、平穏な軍隊生活だったそうです。とはいえ戦況が不利になるにつれ本国からの補給がままならず、満州は自活するとの方針で食料などは現地で生産をしたそうであり、父の役目は本隊から離れて蜜蜂を飼ひ蜂蜜を採ることと、猟をしてノロという鹿に似た動物を仕留める等の食料調達が主な仕事の軍隊生活だったとのことでした。

八月十五日の終戦を境に二年間余、音信不通、生死さえ分かりませんでした。

帰還の一年ほど前、やっとシベリヤでソ連の捕虜として生きていることだけは一緒に捕虜になり先に帰られた方（湖北の人だったような気がします）からの情報で分かりました。

帰国した父の話によれば、当時のソ連はシベリヤ開発五カ年計画の途中にあつて、多くの労働力を必要とし丈夫な者は最後まで使い、極寒のなかでの労働に耐えられなくなった者順に帰したこと、多くの人が極寒と栄養失調で亡くなったこと、自分は丈夫であつたので最後の引き揚げ船になつたとのことでした。

主食は黒パンで、切り分けたパンを抽選し順位で分けるのですが、先の人は端を取ること、それは縮まっていて水を飲めば増え、いくらかでも空腹を満たす知恵だったこと、副食は魚の塩蔵品がほどほどにあつて食べられたとのことでした。

強制された重労働はシベリヤ開発のための森林伐採で落葉松の大木を沢山切り、それを貨車に積み込む過酷な仕事だったそうです。あるときの作業中に貨車から木が落ちてきて顔面を直撃し前歯は全部折れてしまい、帰つて来た時には歯無しのお爺さんで、父の父親と兄弟のように老けて見えました。

シベリヤでは重労働と厳寒の生活のなかで思想教育もあつたようですが、しかしウラジオストツクから捕虜輸送船に乗り、舞鶴港の栈橋を渡つてはじめて祖国に「帰れた」と実感し、今までロスケ（ソ連人をこう呼んでいた）に無条件に従わされ、強要・教育されてきた共産主義を上陸と同時に捨て忘れたとのことでした。

多くの同胞を鉄砲ではなく殺し、非人道的で国際法にも違反して人を扱ったソ連と、共産主義に死ぬまで静かな抵抗をもっていました。

父は「異国の丘」が好きでした。作曲した「吉田正」がシベリヤにいて、捕虜の間で歌われていたとのことでした。帰還してからは「岸壁の母」の歌がラジオから流れると耳を傾けていたのを覚えています。

父の母親は出征一年後に腎臓の病で息子の身を案じながら死にました。

父には余計な心配をさせまいと内密にしていたのですが、姪の便りで知ることになったという経緯があります。その姪も近年鬼籍きせきに入りましたが。

「岸壁の母」を聞きながら静かに母を思っていたのでしよう。

これが私の記憶している父が話していたシベリヤ体験のあらすじです。

戦争は人の運命を変え、鉄砲は人を殺すために人に向かって撃つ、戦いのない世界、核兵器のない世界を実現するため人々は力を合わせなくてはなりません。

集団疎開の記憶

松原 サト子（並木在住）一九三五年生

私は昭和十年、東京府西巢鴨に兄弟姉の末に生まれました。今でこそ賑やかな巢鴨地蔵尊はハトポツポのお寺としての遊び場で、先年亡くなられたご住職は、私の主人の同級生でした。

西巢鴨第四国民学校三年の時、戦争が激しくなつて政府は三年生以上を集団疎開させることになり、その第一陣として昭和十九年八月二十一日、隣県の山梨県北巨摩郡の八ヶ岳山麓にある母の実家にいづれ疎開をすることになるかもしれないからそれ迄と、私は長野県更科郡上山田村に集団疎開をしました。その頃としては珍しくシンガーマシンを持っていた母は近所の人にモンペ^{注1）}や防空頭巾の作り方を教えていて、私は母の手作りの白のブラウスに赤いハーフコートの様なのを着せて貰いました。父が大きな字で東京の住所を書いてくれたはがきを数枚持つて、泣き乍ら^{なが}見送る大勢の父兄達の顔を暗いホームを動き出した夜汽車の窓から見乍ら^{なが}上野駅を発ちました。

翌朝、戸倉駅から歩いて千曲川にかかる木造の長い大正橋を渡り、広い田畑と大きなリンゴの大木を見乍らこれから生活する亀屋本店旅館に着き、大勢の教育関係者やご主人、従業員等に出迎えられました。

一班が十畳位の部屋に五く六人での生活が始まりました。東京からまだ二十歳前の寮母さんが一人で三室ぐらいを受持つて世話をしてくれましたが、めそめそ泣く子、集団生活になじめない子、班長の六年生が一番偉いのだと言い張る子などいて時々泣いてるのを見かけました。お風呂はどんどん湧き出る温泉に入り、勉強は学年別、食事は班毎で広間の長い座卓を

使に行なわれました。

まだ暑さの残る初秋、班が違っていましたでしたが同級に正子ちゃんと言う友がいて、勉強の時は一緒に仲良しでした。東京に居た時お父さんは出征し、お母さんとお婆あちゃんそして可愛い弟が居て、我が家にも遊びに来てくれました。ある日家にも来てと言われランドセルを置いてから探し乍ら行くと、この辺かなと思っていた時大輪のバラが一杯咲いてる垣根があり、余りの香りの良さ鼻をつけたままでいた時、その家の玄関から正子ちゃんが出て来ました。その正子ちゃんが急に親類の家に縁故疎開することになり、帰京してしまいました。

「いいなお母さんの所に帰れて」と羨ましかったり淋しかったです。間もなく、先生から正子ちゃんはその疎開先で空襲にあい亡くなったと知らされ、その驚きと悲しさは今でも、何処に居てもバラを見るとあの香りと共にオカツパ髪の彼女を思い出し胸が痛みます。

秋も深まった寒い日、東京から校長先生と共に父兄会の数人が子供達の生活など教育当局に報告する為旅館に来ました。その中に母が居たのです。嬉しいやら何やら有頂天になりました。一泊で帰京してしまいましたが、東京でやっと買ったと言うゴム長靴と大豆の炒り豆を貰い、班内には意地悪な上級生も居たので、夕方自由時間に近くの月見草の咲く千曲川のゴロゴロ石河原でゴム飛びを一緒にした友達と分け合い食べました。思いがけなく一人丸ごと一個のリングがおやつに出る日が数日あって嬉しかったこと！美味しかったこと！

何度か学校交流の為に、上山田国民学校に皆で歩いて行く事がありました。その日は夜来の雪が積もり寒い日でした。私は喜々として、あのゴム長を自分の荷物の中から出し玄関前に整列したのですが、忘れ物を思い出し長靴を下駄箱に入れ直ぐ戻って来たのに長靴がありません。仲間の生徒の中には見当たらず、仕方なく私は下駄（歯がへらない様に竹を打ちつけ

てあったもの)を履いて、往復二時間の雪の道を母がこんな日のための様に持参してくれたのにと、くやしいやら冷たいやら涙をこらえて歩きました。後日、先生は「この辺の寒さには何よりの重宝物、旅館の関係者か誰か自分の子供の為に持ち帰ったのかな」と言っていました。

だんだん食事が少なくなり、おかずも茄子の煮物だけだったりして来た頃、旅館のご主人が出征しました。背が高く色白で優しいおじさんが日の丸の旗を肩からかけて大勢の人に見送られ、敬礼をし乍らの後姿を見た時、近くに居た綺麗なおばさんが泣いてる様に見えて、子供心にも淋しくなっちゃうんだなと思いました。

年が明けて昭和二十年二月いよいよ東京も危ないと、大森に事務所を持つ父は東工大を受験する予定の兄と東京に残り、母と姉達が山梨に疎開することになりました。丸坊主に府立九中の詰衿の制服を着た兄一人が私を亀屋旅館に迎えに来てくれました。山梨には大きな藁屋根の家に、背が高く乃木大将のような立派な白い髭の祖父も居て喜んで迎えてくれました。三月十日の東京大空襲の夜は南に富士山、西に南アルプス、北に八ヶ岳を見渡す高台にある家から、甲府盆地のずっと東方面が夜空を赤く染めてるのを見たとき母達が心配していました。数日後、広い庭の垣根越しに父の姿を見た時の一家の喜びは最高でした。父の背負っていた大きなリュックサックに焼けこげた様な黒い穴があり、それが雨の様に降って来た焼夷弾の跡であることを知り、私は初めて戦争の恐ろしさを身近に知りました。本当に今迄、飛行機も爆音も防空壕も一度も目にした事も耳にした事も無かったですから。

約半年間の集団疎開のお蔭とは言え、東京での父母、兄、姉達の物不足、食糧不足の中での生活がどんなに大変だった事を改めて知りました。兄達は登校しても授業は無く、兄は校庭で軍事訓練、姉は長い時間電車で通学しても講堂で軍事工場員として過ごす日々だったそうです。

四月、山一つ越えた所の大泉村の国民学校に四年生で転入した私は、勉強よりも祖父からじゃが芋の植え方、菜種の取り入れ方、大豆の蒔き方、田植、せり摘み、蕨取り、山に杉の苗木植え等教えて貰ったことを覚えています。

まだランプの生活から電気が通じ数年もしていないこの時、以前父が東京から持参したラジオは電圧が低く蟬の声も邪魔になる様な音で、八月十五日の終戦を知らせました。

一年生の時の書初めは「ヒノマル」でした。朝礼の時は、最初に全員で奉安殿（天皇陛下の写真が安置）に最敬礼をして始まりました。あの賑やかだった校庭に居た友は今何処に。再建された小学校では戦時中の資料は一切無し。亀屋旅館も代が替わり、集団疎開の児童を受け入れたと言う記録があるだけでした。

母がぼつりと言いました。

「疎開する前、近くにB29が落ちてもう死ぬかと思った空襲の後日、近所の人とその場に行った時、機体から半分身体を出して死んでいたアメリカ兵の身体にウジが居り、ツバを吐きかける人、足で蹴飛ばす人達が居たけれど、見ればまだ若い色白の幼なさの残ってる顔を見て、この人にも親や兄弟も居るでしょうにこんな遠くで死んでしまい可愛想で、私は心の中で手を合わせたのよ」と。

戦争のむなしさういっか書き残したいとその機があり乍ら過ごしていた折、七月の並木小のふれあいサロンでのお話に、一気にペンを持ちました。

二〇〇九(平成二十一年)八月記

長崎原爆資料館

的山 ケイ子（新木野在住）一九四五年生

「今年、中学生の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への派遣は、長崎だそうですよ。」
私のふるさと、「長崎へ」。

私が、母のお腹の中で被爆した、あの「長崎へ」。

そう、派遣された中学生は、「あそこへ行くんだな。あそこへ足を踏み入れるんだな。」

私が、体内被曝児^{注156}として六十五年生きて、いまだに一步も足を踏み入れることのできない場所へ。そこは、「長崎原爆

資料館^{注157}」。

昭和六十二年十二月、暮れも押し詰まった頃、私は、職場の仲間四人で、三泊四日の九州一周旅行に出かけた。熊本空港に降り立ち、阿蘇、宮崎、桜島、天草まわり、いよいよ長崎へ。中学校卒業まで住んでいた、なつかしい町へ。大浦天主堂、グラバー園、平和公園と見てまわり、「長崎原爆資料館」に入るようになった。

私は、資料館の入口で「みんな見てきて。私、ここで待っているから。」と、中へ入ることができなかったのだ。その後、何回も長崎へ帰郷したことはある。しかし、いまだに資料館に足を踏み入れたことがない。入ることができないのだ。

私は、そんな自分に「何をそんなに恐れているの。」と、自問することがある。

私が体内被曝をしたのは、この世の中に生まれ出る一カ月前、九カ月の胎児のときである。母のお腹の中という、これ以上望めない、素晴らしく安全な場所でのこと。まだ、目も見えず、耳も聞こえず、臭いをかぐこともできず、素肌は外気にさらされることもなかったのだ。

原子爆弾の炸裂した閃光も、人間の黒こげの姿も見えず、人々の泣き叫ぶ声も、「水、みず」と、うめく声も聞こえず、人の肉の焦げる臭いも知らず、母の愛にくるまれて、この世の中に生まれ出る夢を見ていたのだ。

いまだに、原爆資料館に足を踏み入れることができない私。「何も知らないのだから、生まれる前のことなのだから、なにも恐れることはないのだ。」と、自分に言い聞かせる。しかし、恐ろしい自分の過去を知りたくないという恐怖は、足の歩みを止めてしまう。

胎児として五感未熟であっても、私は、母のお腹の膜を透し、すべてを見て生まれてきてしまったというのであろうか。原子爆弾というものは、この世に生まれ出していない未完の胎児にさえも、命に刻む恐怖を与えてしまったのだろうか。

私の老後の目標は、「百まで生きる」である。体内被爆児の私は、広島・長崎の全被爆者の中で一番若い。原子爆弾の被爆の生き証人として長く生き続け、原爆と戦争の悲惨さを、平和の尊さを世に訴えたいと思っている。

そして、いつの日か、私の人生のはるか遠くに「死」が見え隠れするようになったとき、まだ、長崎までの長旅に耐えられる体力があるときに、意を決して、長崎原爆資料館を見るために長崎を訪れ、この世に生まれ出る前に、私の命に刻みこまれた恐怖と向き合ってみたいと思う。

戦争は犯罪だ

三谷 和夫（天王台在住）一九二八年生

私は軍国少年だった。小学生のとき日支戦争^{注158}が始まる。学校から二キロの田んぼ道を歩いて兵隊送りに行った。中学一年生のとき太平洋戦争が起こった。授業で「教練」という軍事訓練を受けた。命令一下一せいに腹ばいになり、よじるように進む訓練もあった。中学三年生では、一人ずつ鉄砲が与えられた。立ったまま、また腰を下ろして、そして腹ばいで鉄砲を撃つ訓練があった。すべて戦争に兵として行くためのきびしい訓練であった。銃につけた剣でわら人形を突くのもやった。敵兵を殺すけいこだ。

四年生では、勤労働員といって、勉強はやめ工場で兵器をつくる作業に毎日行った。私は名古屋陸軍造兵廠^{注159}という工場へ派遣された。

毎朝八時に集合し、隊列を組んで工場へ行進した。私の仕事は、フライス盤という機械を操作して、鉄板を切ったり削ったりし、対戦車砲の部品をつくることだった。間もなく昼夜交代制になり、正月一日も夜勤をした。戦争がはげしくなり、工場の上を敵機が機銃掃射して、窓ガラスが割られたりした。あるときは敵の戦闘機にねらわれ、鉄砲で撃たれたが、家のかげにかくれてどうにか逃げる事ができた。

名古屋が焼夷弾（強く燃える燃烧剤を入れた爆弾）による攻撃をうけた。私は田舎の家の屋根に上がって遠く眺めた。きれいに花火のように見えたが、名古屋の町では阿鼻叫喚の地獄絵図がくりひろげられていた。その後四日市の町が焼かれ、

友人の家は丸焼けになった。すぐあとで焼け跡を見学に行った。焼け棒杭のような死体が、いくつも黒焦げでころがっていて思わず立ちすくんだ。焼け野原の中に、防火用水の水槽があり、この水を求めて何人かが争うように焼け死んだ死体が群がっていた。私は十七歳だったが、友人は予科練という飛行機乗りを志願して行き、戦死した。私も二十歳になれば兵隊検査があり、当然お国のために戦争に行き、死ぬものと思っていた。

だけどその前に戦争は終わった。敗戦だ。

ことし八月十五日原爆写真展を見、また映画「ヒロシマ・ナガサキ」を見た。勤労学徒の焼死体の写真も見た。私もこうなっていたかも知れぬと思った。というのは、私も広島へ行ったかも知れなかったからだ。広島高等師範学校へ入学を希望した私は、急性腎炎になったため、入学試験（筆記）に行くことができず、不合格であった。合格していたら、広島で勤労動員になっていたはずで、ちようど原子爆弾を受けたことになる。

広島の平和記念館をみたとき、その悲惨な姿にぎよつとして、正視することができなかつた。もしその時には助かつたとしても、六十年もたつて白血病におそわれたかも知れない。幸いにも私は原子爆弾に会わず、焼夷弾も受けず、また兵隊にも行かずに、今の自分があると思うと、よくまあここまで生きられたと、不思議な気さえする。

戦争は所詮殺し合いである。殺すか殺されるか、せつぱつまった中での所業は、きれい事ではすまない。戦争から生きて帰った人が、戦争について黙して語らないとよく聞く。戦争の中では、残虐で、卑怯で、破廉恥で、およそ非人間的なことが起こり得る。戦争は人を狂人にすると言えるのかも知れない。

最大の戦争被害は核兵器によるものだ。世界に今広島原爆十万発分が存在すると聞く。人間の誰かが誤って手をつける、あるいはテロの仲間がこれに手をかけると、どういうことになるか。大量破壊だけでなく、地球の破滅、人類の滅亡さえ招

きかねない。地上から核兵器をなくそうというオバマ大統領の提言は、極めて重要で、世界中がこの問題解決に取り組まねばならないと思う。

同時に、たとえ小ぜり合いであっても戦争は、大量破壊兵器の使用につながる保証はない。一旦戦争が起こると、それが引き金となり、いかなる事態に発展するかは、もはや予測出来ないといった方がよい。何とかして戦争の発生を食い止めねばならない。

戦争は犯罪だと私は言いたい。国際法ではいろいろの提案などがあり、むつかしい議論があるようだ。しかし、単純明快に、戦争は犯罪だと考えるのが、現在から未来に向けて人類にとって有益であり、重要だと考える。犯罪を伴わない戦争が、今後あり得ようか。

日本国憲法の精神にも通じると私は思う。もう一度世界中の人間が、戦争は犯罪だと考え直したい。そうしてあらゆる手段を駆使して戦争の発生を未然に防止したい。

くり返して言おう、戦争は犯罪だ。

私の戦中体験

光成 高志（南新木在住）一九四二年生

昭和二十年八月八日は広島県福山市に空襲があった日である。

私はこの時、三歳と四ヶ月、三つ子の魂百までとはよく言ったもので、私はこの日を今もまざまざと覚えている。同級生の内でも満三歳になっていないものは、この事を覚えていないと言う。私の生家は市街から山を越えた芦田川の支流の有地川あるじがわ近くの小高い丘の上に在った。空襲の B 29 の市街を遣り過ぎる音、その機影を庭に立って仰いでいた父の姿がおぼろげながら私の知っている父の姿であった。ひやと言っていた母屋に並ぶ別棟の部屋から、防空壕に移ったその壕の前で、隣のおやじが猟銃を持って来て、畜生と空に銃を向けていたこと、向うの山にぼおーと火の手が挙がったこと、これは誤って焼夷弾を落としていったことによること、火の見櫓やぐらの下の薄暗い割と大きな防空壕の中のこと、以上が私の戦中体験である。私の家の前の畑の崖の所にも防空壕があつて、戦後そこに入つて遊んだりしたが、昭和四十年頃崩れて消滅した。父は戦後明けの正月に亡くなったので、父の記憶はあの日の庭に立つ後姿のみで顔は覚えていない。

昭和二十四年に小学校に入学その年の湯川秀樹博士のノーベル賞受賞があつて、校長が原子も太陽系のようにぐるぐる廻っていると言うことを黒板に書いて講演したことを覚えている。私は人一倍臆病であつたのか純朴であつたのか、「ターザン」という映画が講堂で黒幕を張つて上映された時、怖くて怖くて、どうしても見られなくなつて、途中ひとり運動場へ出たその明るさを眩しく思った記憶がある。昭和二十九年の「二十四の瞳」の映画に感動した翌年中学に入って、社会見学の

一環と思うが、町の映画館に映画を見る会があって、「硫黄島の砂」と「ひろしま」を見た。いずれも日本が戦争に負ける悲惨な戦争映画である。この年十三才であったが、その日の夜、映画のシーンを思い出しては怖くて輾転反側眠れずに夜を明かしたのを覚えている。小学校時代に良く見る夢は、薄暗い空を大きな飛行機がごおーと飛んで来て、私は泳ぎの形で空を飛んで飛んで逃げる苦しい夢、地に落ちそうになるので耐えて両手を必死に漕いでいる苦しい夢、これに悩まされた。それに加えて「ひろしま」の怖い夢。六十七才の今は冷静に思い出して、ようやくこの悪夢から解放された思いだ。考えてみれば、この苦しい戦争記憶の夢に耐えたので、その後の人生の例えばサラリーマン生活の様々なストレスに耐えられたのだと思う。戦後六十三年経って高校のクラス会を開いた時、恩師は福山市内に住んでおられ、あの日、焼夷弾の直撃を受けて腕が腕がれた人を見たと言われた。「可哀そうだったわ」と言われた。人間の生死の極限を体験することは、物理的な衝撃もさることながら、人の心に深い傷を残すということ忘れてはなるまい。私のような直接の戦争体験でなくても、上のようなことを書かざるを得ない衝動に駆られたのであるから、直接戦争体験をお持ちの日本人、特に兵士の方々の体験はいかばかりのものであったか、私には気の遠くなる経験ではなかったかと思うのである。地球の誕生から消滅までの天文学的考察も科学的に出来ている現在、人類はいづれ地球と共に消滅するのであるから戦争という人類同士の喧嘩のようなことを行ってしまう愚はもう繰り返してならないと思う。

ひろしまやタイヤパンクす油照

高志

戦争の頃

深山 恒男（中峠在住）一九四二年生

①命拾い

父は太平洋戦争開戦直前の昭和十六年秋召集され、妻と長女・長男の三人を残し兵役に就きました。出征に際し、妻（私の母）のお腹には更に新しい生命が宿っているのではと思いつながら、海軍基地のある横須賀に向かったそうです。後年母の話によれば、親戚や周囲から「戦地に行けば生きて帰れる保証はないので腹の子を墮したほうが良い」と言われたそうです。しかし勧めに応じることはせず、翌年の昭和十七年四月二十五日未明、実家の我孫子町青山で男子を産みました。それが私です。母が周囲の勧めに応じていけば、今の私はありません。指導者が如何に勇ましいことを並べたて、国民を鼓舞しても、赤紙は死の宣告書と受け止めていたのが、一般国民の感情だったのではないのでしょうか。

父は、商船を改造した対潜水艦用駆逐艦に乗って Guam 島周辺や南方海域で米軍と対峙していました。そんなある日、艦は撃沈され海に放り出されましたが、運良くボートに乗れました。しかしそのボートも再度の攻撃で破壊され、父は木端に捉まり十数時間海を漂った挙句やっこのことで救出されました。命を拾えたのは、「平泳ぎができたから」と事ある毎に言っていました。まさに九死に一生を得て無事復員出来ましたが、もし父が海の藻屑となっていたら、親戚や周囲の心配通り、三人の子供を抱え、そのうえ病弱で僅かな畑しか所有していない貧農の母の生活は到底成り立たず、母子バラバラもあり得たでしょう。

② 御飯が欲しい

私の生家は湖北小学校から直線で二百メートル程の距離にあり、戦争中は所謂在郷軍人いわゆると呼ばれたであろう兵隊が駐屯しておりました。昭和十九年のある冬の夜、姉・兄と私（多分二歳半）の三人が炬燵に入っていたら突然数人の兵隊が家に入ってきて、小さな蜜柑を数個、畳の上を転がして寄こしました。その後母はご飯を炊いて兵達に食べさせました。多分支給されたであろう小さな蜜柑を手土産にしている事から推察するに、兵達も好き好んで食料漁りをしたのでは無く、良心の呵責かしやくに苛まれながらの行動であったのではと思われれます。それから暫くした昼下がり、一人の兵隊がやってきて母に食事をさせて欲しいとしきりに懇願していました。私は傍らでじっと見ていましたが、母は断り続け、その兵隊は結局食事にはあがりつけなかった事を今も鮮明に思い出されます。

食べ物と言えば「さつま芋のツル」ですが、私も食べました。醤油味でとても美味しかったことが思い出されます。長じて母に「さつま芋のツル」を食べたいと何度となくせがみましたが、その度母は笑うだけで食べさせてはくれませんでした。また何時のことかは定かではありませんが、母がお腹の空いている私に「エンジ色のモロコシパン」を呉れました。ゴソゴソで味気なくとても喉を通る代物ではありません、私は一口食べただけで畳に放り投げました。困惑がちな悲しい目をした母の顔を今も忘れることはありません。国内にあってもお腹を空かした兵隊等に請われれば、乏しい食糧事情にあっても食事を振る舞わなければならない銃後の家族や市民の苦勞が忍ばれます。日本中が空きつ腹ばかりでよくもまあ戦争したものだと思わずにはいられません。

③ グラマン

時期はハッキリしませんが二十年の春か初夏の頃、父の居ない家庭は何かと不自由があったのでしよう、母は一里少々（五キロ）の青山の実家に度々援助を求めていたようで、当時シバラ（芝原城由来の俗称地名）と呼ばれた中峠から徒歩で行き来していました。そんなある日、叔母（日秀から母の実家の青山に嫁いでいた）と母、そして子供達の数人で、リヤカーを引いて青山に向かいました。下ヶ戸さげと付近に差し掛かった時、誰かが「グラマンが来た」と叫んだので急いで近くの竹藪の陰に隠れました。上を見ると中低空を東京方面へ向かう銀色のグラマンの編隊が見えました。

そんなある日には「昨夜東京の空が真っ赤だった」と騒ぐ大人達がありました。東京大空襲です。

④ 父帰る

昭和二十年の秋の昼下がり、私が三歳半の時、母が風呂に入る様に言ったので、子供達三人で大騒ぎしながら湯船に浸かっていると、玄関先で男たちの声がしました。私は風呂を飛び出し裸足で土間を抜け玄関に行くと、母と数人の男達が話をしていました。その中の一人が父でした。胃を壊してしまった父は、海軍でありながら終戦直前は憲兵として陸上勤務となり、平塚市にいた為早い時期に復員出来ました。

平塚市のある相模湾は、米軍上陸候補地でしたが烏帽子岩注160があつた為あきらめたと聞いています。当初通り上陸していれば、父の復員は叶わなかったことでしょう。乳児の時一度横須賀の基地に行つて、母が父に私を見せているそうですが、物心ついてからは初対面で、突然現れた父には馴染めず、ママ父の様な存在でした。戦争は親子関係までも壊してしまうものだと、つくづく考えさせられます。

満州に嫁いで

矢澤あさ（亀有在住）一九二〇年生

私は布佐に農家の長女として生まれました。二十三歳の時、おじの友人を通じて南満州鉄道^{注161}（満鉄）で働いていた主人を紹介され、満州に興味を抱いていた私は、見合い写真一枚で結婚を決意しました。さすがに父親は、そんなに簡単に遠方へ娘を嫁がせるわけにはいかないと考えたのでしよう。主人を日本に呼び出しました。主人は何とか一ヶ月の休暇を取って帰国し、昭和十八年十一月五日に祝言を挙げた二人は満州へと向かいました。

急行で一昼夜かけて下関に着き、そこから船で釜山へ渡り、更に汽車で長い時間朝鮮半島を北上し、奉天から西へ百五十キロメートルの地、大虎山^{たごさん}^{注162}に着いたのは昭和十八年十二月一日のことです。木も無く草も無く、見渡す限り荒野が広がるその風景は、日本では想像できない寒々としたものでした。大虎山には満鉄の社員・家族など約百人の日本人が住んでおり、更に多くの現地人が満鉄で働いていました。私の主人は機械工で、極寒の満州では極めて大事な暖房設備の維持を任務としていました。ある時日本語を話せない現地の若い男性が、紐でしばった大きな肉のかたまりを家に届けにきたので、何ごとかと思つたら、主人が部下（彼）に赤ちゃんが生まれたと聞いたので「風邪をひかせるなよ」と、内緒で石炭を麻袋一袋持つて帰るように言ったのだそうです。肉のかたまりは、彼からの感謝の気持ちだったのです。

その後、主人との間に一女をもうけたのもつかの間、昭和二十年八月十五日の敗戦を迎え、満州は大混乱となりました。一体この後どうなるのか、何が起こるのか。主人は十八日の夕方、何か情報が入っていないかと満鉄の事務所に出かけまし

た。と、その後です。

「暴民（満人）が襲ってくるぞ。」という話が伝わってきて、私たちはみなコーリヤン^{注163}畑に逃げそこで一夜を明かしました。何軒かの家が実際火をつけられ、その明かりの中で見つかった金目の物が持っていかれたそうです。

翌日の十九日には、軍からの指示が出て、私たちは大虎山から列車で二時間半ほどの距離にある錦州市^{注164}へ集合することになりました。前日に別れてしまった主人とは、大虎山の綿花工場の倉庫で再会できたのですが、その間に主人は警護隊の人に付き添われて自宅に戻り、お金や衣類などを持ち出してきていたのです。生まれて間もない乳飲み子を抱えた私たちにとって、この荷物は本当に助かりました。

錦州市には、満州全土からと言ってもいいほど大勢の日本人が集まってきました。その中、満鉄社員の間を副局長が回って歩き、「お金がないので少ししか渡せないが、一年たてば必ず日本に帰れるから助け合って頑張りましょう」とお話になりました。私はこの時の「一年たてば必ず帰れる」という言葉を信じて、それからの日々を過ごしたのです。

翌年の昭和二十一年五月。進駐してきた米軍が輸送船を使つて、葫蘆島^{注165}から佐世保まで日本人の輸送を開始しました。近くの錦州市にいた私たちは、船に乗る一週間前から米軍の指示で労働に従事し、五月二十四日に乗船することができました。その際に認められるのは一人当たりリュックが一つ、お金は千円までで、それ以外の物は没収されてしまうのです。中には、若くないからという理由で、派手な色の衣類を没収された人もいました。

私たちと一緒に乗船した石川県出身の坂本さんというご夫婦は、子どもがいないから身軽だといって、荷物を持って下さったり、色々と世話を焼いて下さいました。佐世保に着いた時には、万一のために私のリュックに入れておいたお米一キロを飯盒^{はんごう}で炊いて、おにぎりを一緒に食べて、お別れをしました。

日本に着くまでの間に亡くなる人もいました。一歳のお子さんは小さいので火葬されてお骨となって日本に帰りましたが、十八歳の娘さんが亡くなった時には、毛布でくるみ、海へ流して水葬となりました。死者を弔うために船が回りを三周回るので、その時の汽笛のたまらなくせつない音色と、船が回転するために大きく揺れたことが今でも思い出されます。

未来に夢を描いて満州に渡った私ですが、その私が三年後に、全てを失い薄汚れ、坊主頭で着の身着のまま、乳飲み子を抱えて日本に帰ってくるとは、誰が予想したでしょうか。

それでもまだ私たち家族は大変運が良かった方です。満州開拓団^{註16}として奥地に入っていた人たちは、ソ連軍の侵攻に逃げまどい、それはそれは大変な思いをしたようです。

のちに新聞記事で、私たちが住んでいた大虎山の日本軍飛行場から、十機の九七式戦闘機が、南下するソ連戦車群に向かって死の出撃をした事を知りました。その兵隊さんたちは、パニックになった私たち慰留民に、錦州市へ向かうようにと言って送り出してくれた人たちでした。戦争が終わって四日後の、八月十九日の出撃でした。

広島市原爆を体験して

山田 清一（船戸在住）一九二六年生

私は、昭和二十年四月二十四日、広島市の暁一六七一〇部隊（船舶通信補充隊）に入隊し、約四ヶ月に入ったばかりの八月六日に、原爆投下により被爆者となりました。

被爆であると言うことは、数日してから知らされました。当時の広島は毎日のように警戒警報や空襲警報が発令され、生きた心地がありませんでした。八月五日夜も空襲警報が発令されたので、重要な無線機類と共に近接の比治山に避難し、早朝になって警報解除となり、われわれは兵舎に戻り就寝許可となって、間もなく、原爆が投下されました。

その時の記憶では、眼・鼻や顔全体が埃ほこりと息苦しさで目覚めて見ると、窓の外一面が埃と黒煙に包まれ、所どころ、火の炎が見え、吃驚びっくりぎょうてん仰天、飛び起きて、大変だあ！と大声で叫さけび、班内を見ると、寝台は歪ゆがみ、二階の階段は曲り毀損きそんし、降りるにも足下あしもとに注意して一階に下り、外へ飛び出しました。

外へ出ると、二、三人の戦友と共に、兵舎の外に出て、我々は夏の薄着の服装で、裏門の方へ歩きはじめると、兵舎は大半が全壊していました。その中、兵舎の方へ沢山の市民の方が、兵隊さん助けて下さい。水を下さいと叫び乍ら入って来ました。日中は大変暑くなり薄着のままの男女の姿は、顔の目鼻から皮膚が垂れ下りお化けの様でした。あの惨状は言語に絶するものがありました。

我々戦友も、朝食も昼食も食わず、無我夢中で、悲痛な思いで比治山の防空壕の中で一夜を過したように記憶しています。それから数日間は市街地への救援活動で跡片づけや、道路の整理等で過しました。人体の黒焦げの姿も見うけられました。ここで、私が尊敬していた、今は亡き当時の上官の人間味のある感動的な素晴らしい「運は呼んでいる」の記を、叙述させて頂きます。

『私が週番士官をしていた幹下候隊（乙種幹部候補生と下士官候補者の教育中隊）も勿論寝ないで警戒に当たっていた。夜のうちは緊張しており眠くなかったが、空襲警報も警戒警報も解除された途端に眠くなった。そして就寝も許可となり、その直後の出来事である。眼を開けたら砂煙りで何も見えない。その瞬間、大地震でないかと考えた。「日本は今大きな戦争をしているのに、「こんな大地震があったのでは大変だ」と一瞬思った。音が静まり、砂煙も治まったので、もう一度、眼を開けたら寝ている鼻先に天井が落ちてきており、身体の西側には梁があり挟まれた形となっていた。頭にも怪我をして血が流れていた。外に飛び出したが何がなんだか判らなかつた。

これが原子爆弾とわかったのは、後日のことである。しかし、運がよかつた。防空用暗幕を張り真暗にして寝ていたことが、無事生存していた原因である。中隊の者の中には身体の一部に火傷を受けて、或いは、落ちてきた梁の下敷となって死んでいった者もいたが他の中隊のように、営庭で朝礼をやっていたことが幸したのである。また、部隊のすぐ隣まで原爆による爆風と熱で燃え上ってしまったので、部隊は倒壊のみで延焼を免れたことも幸せであつた。

学生時代「国のためには血を流し、人のためには涙を流し、己のためには汗を流す人間となれ」と教わつた。この精神を忘れずに、これからもずっと長く、永久に実行していきたいと考えている。

ここまでやってこられたのも、健康、強運もさること乍ら、第一に、上司、先輩、同僚、後輩に支えられ、且つ恵まれたことが大きな要因となつて、ここまでやってこられたのである。

遠い昔のことは、綺麗きれい、さっぱりと忘れたい。ただ、強烈に深く脳裏に刻み込まれて忘れられず、思い出として残るものと、楽しかった思い出だけは、自分の歴史として、いつまでも忘れないよう記録に留めたいと思っている。さあ、これからは力一ぱい活躍しよう。そして有意義な人生を送りたいと思っている。』

以上、先輩、上官の所感の一端を述べさせて頂きました。

私が先輩教官の思い出を記述させて頂いたのは、私は四カ月の軍隊生活のためか、訓練中の毎日でしたので、特に、当時の状態を或る程度、知るために戦友記を探し発表した次第です。

斯様な毎日の悲惨な軍隊生活も、十日後の八月十五日となり、無線機により、天皇陛下から終戦の玉音放送を拝聴し、悲しみ胸に込み上げ、悲涙に咽び泣く震撼でありました。

九月に復員する頃は、兵舎は殆ど、台風の影響により全壊の状況でした。

終戦詔書の一部

爾なんじ臣民の哀情も朕善く之を知る。然れども朕は、時運の趨く所、堪え難きを堪へ、忍び難きを忍び以て萬世の為に、太平を開かんと欲す。と申されました。

某少尉の序に、我等軍人、我等一億同胞の感動、只々恐懼感泣お措く所を知らず、今や我等は虔つしんで聖旨の存する所を窺い奉り承詔必謹の至誠を捧げ奉らんのみ…云々

入隊前の軍歌の一節

○勝つてくるぞと勇ましく

誓つて国を出たからは

手柄を立てずに死なりようか

進軍ラツパ聞きたびに

まぶたに浮かぶ母の顔

○わが大君に召されたる

命栄えある朝ぼらけ

称へて送る一億の

歓呼は高く天を衝く

いざ征け強者、日本男子

○海ゆかば水漬つく屍かばね

山ゆかば草むす屍

大君の辺にこそ死なめ

かえりみはせじ

船舶隊の歌

一・暁映はゆる瀬戸の海

昇る朝日の島影に

偲しのぶ神武の御東征みいくさや

五条の勅諭みことかしこ畏みて

強兵つはもの吾等海の子は

水漬く屍と身を捧ぐ

あゝ忠烈の船舶隊

三・海浪風波荒れるとも

爆撃雷撃しげ繁くとも

ただ黙々と進み行く

奇襲に勇む鉄舟群

水際みぎわに上る勝鬨や

上陸戦は我にあり

あゝ壮烈の船舶隊

二・伝統永し五十年

聖戦幾度海越えし

勲輝いさをく我が部隊すいし

出師の任の重ければ

大命一下たちまちに

わが艦もつせうは波をける

あゝ勇壯の船舶隊

四・潮路はるけき戦線を

銃後に結ぶ輸送船

対潜対空ゆる弛みなく

無線の波に打ち乗りて

わが船団はひた進む

補給ほきゆうの戦我いくわにあり

あゝ重責の船舶隊

終戦時の思い出

湯本 美恵子（若松在住）一九二五年生

「満鉄医院看護婦養成所生徒募集」

昭和十六年、向学心に燃えていた私は親の強い反対もありましたが応募し、ハルピン^{注167}に向かいました。十八年に卒業後は満鉄病院小児科に勤務しました。

ハルピンの異国情緒溢れる美しい街並みは、日々厳しい学業や規則の中にいる私達にとって魅力的でした。今も寄宿舎の友の顔と共に青春時代の幸せな時を過ごした大好きな街としてなつかしく思い出します。

二十年八月七日の真夜中、突然照明弾があたり一面を照らし出し昼間のような明るさになった、と思った途端ソ連兵がいつきに市内へと侵入してきました。終戦のたった一週間前のことでした。

それからの日本人は、銃を持ったソ連軍、又今まで土地を取り上げられたり、最下層の仕事ばかりで生きなければならなかった満人との立場が逆になって、双方から攻撃されるようになったのです。北満からは女、子供、年寄り達が逃げてきて駅は避難民で溢れ、寺や学校は収容者でいっぱいになりました。

十五日終戦。病院のベッドはソ連兵に明け渡すため、日本人は出される事になりました。帰るところの無い人は陸軍病院へ移りましたが、移動中になくなった方もありました。それから、危篤状態の方を防空壕に移しました。命の終わるときを見守りましたが、それも退出する時間の限界となり、処置をしなくてはならなくなりました。

つらい思いを振り切って「1, 2, 3,」の合図と共に土をかけました。その瞬間意識はもう無いはずなのに「カツ」と目を見開き天を仰いだのです。一同は息をのみ、立ちすくんでしまいました。今でも頭に焼き付いて忘れる事ができないくらい出来事でした。戦争のなせることとはいえ、皆、心に深い傷跡を長く長く負うこととなりました。

ソ連兵は一番始めに囚人兵を街に放ちました。女性や金品を求めての悪辣三昧^{あくらつさんまい}、腕には略奪した腕時計を何本もはめて銃を手に威嚇しながら町をかつ歩します。

陸軍病院ではソ連兵が軍靴を高く鳴らして部屋の周りをまわりだしました。最悪のことを考えて、恐怖のあまり一カ所に固まって震えていましたが、最後の手段で全員がおりつたけの声で叫んだところソ連兵は引き揚げて行ったので難を逃れました。避難所の診療所では人がバタバタと亡くなっていきました。

最初は離乳期の子供が粟、コーリヤン等固いものしかなく消化不良で、次は母乳の出なくなったお母さんの子供たちが栄養失調で亡くなりました。又不衛生の為発疹チブスがまん延して亡くなる方が多くなり、空き地や校庭には土まんじゅうがたくさん作られ、それは悲しい光景でした。

ソ連兵だけでなく満人からの襲撃もあったので女性は髪を短く切って男性を装い用心して暮しました。

ごく身近の若い奥様がご主人の目前で陵辱^{りょうじゆく}されて発狂したのち亡くなったという事件が起き、毎日を恐怖と不安の中で過ごしました。

一時の嵐のような時から少し治安が落ち着いた頃、今度は生きていくための糧を得る苦労がはじまりました。収入は無いし若かったので売るような品物はもっていません。物価が百倍、二百倍と、どんどん上がるので大変でした。中国人の下働きをさせてもらいなんとかしのげることになりましたが、男性も石炭拾い、土方等をしてみな苦労されていました。私は心

優しい中国人の雇い主だったので助かりました。

立派な日本人、優しい日本人はもちろんいっぱいいましたが、一部のエリートだった方や裕福な生活をされていた方、日本人というだけで他の民族の方々を下に見て暮らしていた人にとってこのどん底の状況は、一層辛かったと思います。

翌年春、結婚しました。そんな中、日本人会からの情報で八月二十四日に引き揚げられることを知りました。

無蓋車^{むがい}注108に乗っての移動は大変な苦しみでした。究極の思いで子供を中国人に預ける人、売る人、おしっこをさせる様な形で列車から落とす人、子供の口をふさぐ人。

満員の列車の中の一本のロープにしっかりとしがみつかなんとか移動することができました。

日本の地、佐世保にたどり着いた時はほっとして全身の力が抜けてしまいました。ただ船の中では内地に伝染病を持ち込まないようにと、厳しい検疫がありました。女性だけ集められて、「心ならずも妊娠した人（強姦等で）は処置をして国に帰すから申し出るように」、との通達もあつて厳しい現実を改めて知ることになりました。全員一律千円と毛布一枚を支給され解放されました。

私は夫と共になつかしい故郷に帰りました。しかし降り立った愛知県一宮駅周辺は一面焼け野原となっておりその様子に言葉も無いほどの衝撃を受けました。親しかった友達の家もみな焼かれたと聞き、内地にいても大変だったのだな、としみじみ思いました。

それにしても激動の日々の事を思うと今は年齢ゆえの苦労はあっても平和で幸せな日々だと思っています。

無念の思いで亡くなられた方々のご冥福と家族が断腸の思いで別れて暮らすことになった方々のお幸せを心からお祈り致します。

青春の記

吉澤 フミヨ（白山在住）一九二六年生

終戦記念日も終わり今年で何十年経つのかね。昔の事の様ですが私の心の中にいつも浮かんできます。

八月十五日、あの日は暑い日でした。

ラジオから流れる終戦の天皇陛下の声が聞こえ、近所の人達皆泣いていました。私の母もその内の一人です。私達姉妹はほっとしました。これからは、夜自由に寝られると思った。不謹慎な事ふきんしんですが、これが本音なのです。

これから色々と悲しい事、恐ろしい事を書きたいと思います。この様な事を書くのは初めてなので上手く書く事が出来な
いと思いますが思い出しながら書いていくので理解の方宜しくお願い致します。始めは、私の事からです。

私は、東京向島育ちです。父の会社の社宅に居ましたが、父が亡くなり伯母が居た江戸川に近い小岩という所へと移りました。畑や池もありとても静かでのどかな所です。

戦争が始まり、私も本所にあります航空会社に勤めていました。全寮制だった為、部屋の人とも仲良くなり夜は皆で笑いあったり話をしたりと、楽しい時を過ごしました。休日には必ず小岩へ泊まりに行く事が、私の楽しみでした。

三月九日、あの日……。会社へと帰る時なのです。しかし、とても気が重く帰るのが物凄く嫌でした。そしてその日もまた泊まってしまいました。

しかしその事が幸いでした。会社に居れば防空壕へ入らなければならない。

あの九日の夜、空襲警報発令サイレンが鳴り、私の家も真つ暗な所で家族で寄せ合いどきどきしながら敵機来襲と言う警防団の声でハラハラしてました。

飛行機の轟音がした、B 29です。外では、ピューーンと急襲の弾が土の中に入り私達も生きた心持ちがしませんでした。怖かった、本当に皆で死を考えていました。

大分音も聞こえなくなりほっとした時、西の空を見て驚きました。

空が真つ赤に燃える黒色と一緒に悪魔の様に、空が焦げている様に燃える。

本当に恐ろしい、怖い一夜でした。

一晚中空を見て過ごしました。近所の方々と色々な話をして皆溜め息ばかりでした。お陰様で、私達の所は、無事なので幸いでした。でも、焼けた方々は、どうしているのかなと思いました。

次の日近所で集まり炊き出しをしました。通りへ出て皆でおにぎりを差し上げました。

皆、真つ黒くすすけて衣類の焼けたものを着て、子供の手を引いて歩いて来る人達。無事で良かったなと、子供の顔を見て涙が出ました。皆元気を出して頑張つて下さいと声を掛けて皆で励ましてあげました。

あの人も無事で良かったね、と思いました。

あの市川橋の方へぞろぞろと歩いて行く人達は、行く所があるのかな…と思いつながら無事で居て下さいと陰ながら祈りました。本当に辛い事です。皆町内の人の好意で喜んで歩いて行きました。あの人達皆元気でしょうか…。思い出します。

私も会社に連絡する為に駅まで行きました。しかし電車が動きません。動いたのは、二日目の午後です。行き先は、押上ですが四ツ木までしか行きません。会社までは、大分歩きます。

駅に降り唾然としました。跡形もなく興亡された広い遠くの方まで続いております。

それも足元にまつ黒に焼け爛れた遺体が道いっぱいにあるのです。バラバラになった人達が散っていました。

なんと残酷な光景でしょう…。悔しさと恐ろしさでどきどきしながら遺体をよけ、心の中で「ごめんなさい」と泣きながら歩いていました。

どの位歩いたのか、やっと会社に着いた。やはり全滅でした…。あの大きな建物も無く焼け跡無残な会社の姿でした。無事な人達がテントで手続きをしていました。

あの日私が会社に居たらこの命は今、なかったと思います…。

あの仲間の人達の遺体がいっぱいここにあると思うと私は、生きていて良かったのかなと考えさせられました。無残な姿の人達に悔しさと悲しさでむせび泣きました。

手続きを済ませて、歩いて会社の脇にある横川橋を渡って帰る途中で川を見たら川幅いっぱいの人、人、人。男、女、子供。子供をおぶっていた親子、さぞ熱くて皆飛び込んだのだろう。きつと熱さに耐えられずに…。本当に無残な姿を見て悔しさいっぱいでした。

なんの為にこんな、なんの罪もない人達まで、何の為に戦争なんでしょうね？

私達もその犠牲者の一人です。

毎日、生産、生産と頭に日の丸鉢巻きをして一生懸命働いていました。

「勝つまでは、欲しがりません」と言いながら皆、頑張っていましたね。

国のため、国の為となんでも我慢。私達の青春なんてないのか…。

一日一回軍人が来て銃剣術の訓練がありました。若い男性は、軍人として出征していて、恋も出来ず、おしゃれも出来ず、遊ぶ所も無い。何が楽しかったのか…。今考えるとつまらない青春だった。

私の兄も前の年の十二月に戦死しました。その知らせが来た時母は、仏壇の前に向かって泣いている姿が今でも目に浮かびます。そういう方々もたくさん居る事でしょうね。私達も、親も、さぞ悔しい思いをした事でしょう。

今の若い人達には、考えられない事です。

一生懸命に働いた人達、あの無残な光景。犠牲になって焼けた人達と国の為といって散った人達が居る現在の日本がある様な気がしています。

あの無残な光景、今でも私の心にあります。

あの寮で過ごした日々…。楽しかった事ばかりでした。部屋の人も、会社で亡くなった方も本当に残念です。今でも「会いたいな」と思っています。悔しいです。

思い出しながら書いた為あまり良くまとまりませんでした。わかりにくい所もあったと思いますがご理解ください。

戦争で散った方々、犠牲になった人達に心よりご冥福をお祈り致します。

もう二度と戦争が起こらない様に祈ります。

『父帰る』の記

吉田 健男（柴崎台在住）一九四三年生

父の戦後はシベリア抑留に始まった。当時石鹼工場で働いていた母は私に、もう父が生きて還ることなどないものと諭していた。そんな或る日、久々に休みを貰った母に連れられ、私は近所の理髪店に居た。丸刈りの頭が半分刈られた頃、横に付き添った母の眼前の大鏡に兵隊服姿が現れた。十字路の真中あたりに立ったその兵隊はきよろきよろと辺りを見回している。理髪店の主人が「珍しいな、今どき兵隊さんが復員するなんて」と言い、母も「ご苦労さんなことやね」と相槌を打つ。しかしその人は、兵隊帽を深く被ってはいるものの、よくよく見れば、どうも自分の夫に似ているではないか。いや間違いなしと確信した母は、表に飛び出した。そしてすぐさま、その人を伴って私達は家に飛んで帰ることとなった。私の頭は、三分の一程刈り残されたままであった。これが劇的な、我が家の『父帰る』であった。

この戦争の始まる少し前から、父は大阪市東区（現、中央区）で小さな漆器商を営んでいたが、昭和十八年、私の生後十八日目に陸軍へ入隊させられた。そしてその店舗兼住居は、二十年三月十三日深夜の大空襲で丸焼けになったそうだ。飯盒はんごう一つを手に、乳呑児ちのみこの私を背負った母は、その両親を頼って命からがら同市郊外の町に避難し、その後両親宅の傍に移り住んだという。この住所が如何にして父に知らされていたのかは定かでないが、父もまた、出征時とは異なるこの家に、何とか辿り着いたのである。理髪店の前で辺りを見回していたのは、自分の戻るべき住居を探していたのだ。

こうして我が家に三人揃いはしたが、母から「この人がお前のお父さんや」と告げられた私は、三畳間の隅にしゃがんでひ

たすら泣いていた。そしてその後も、私はなかなか父に懐かなかったようである。父の左手薬指は、いわばへの字に曲がったままであった。捕虜に課せられた作業中の負傷によるものであったそうだが、終戦の翌々年、二十二年に舞鶴に帰ってきた。指一本でも死ぬほどの痛みを味わったようだが、しかしその怪我ゆえに、比較的早期の生還に繋がったとも喜んでいた。それなのに、そして漸く我が子に会えたというのに、泣かれてばかりでは父もさぞや困惑したことであつたらう。一方私としては、生きてこの世で会うことは叶わぬものと教えられていた、その人が今そこに坐っている、そのこと自体が到底理解できなかったのではなからうか。

三歳にもなれば、事と次第により覚えていくこともあると言った著名人がいたが、実際に人間の記憶力がいつ頃からつくのかは知らない。しかし詳細は後に聞いた話としても、『父帰る』のこの日の記憶、すなわち理髪店の夫婦の顔、刈りかけの私の坊主頭、家では泣いてばかりの様子などは、当時四歳といえども、いまだに私の脳裏を離れないでいる。今一つはつきりと覚えていることがある。それは母の通勤路にあつた橋のことである。運河に架かつたその橋の真中あたりに大きな穴があいており、恐々覗き込むと下には泥水が淀んでいた。聞けば焼夷弾の被爆によるものとのことであつたが、足を踏み外せばまず助からないことは明らかな高さだつた。母は若かりし頃の緑内障が原因で、その頃すでに右眼の視力はゼロ、僅かに残つた視力の左眼のみに頼る生活であつた。そんな母が、毎日の勤めの行き帰り、その大きな穴を避けて橋を渡れるのか、私は心配でならなかつた。この橋のことは今も時折夢に見る。

シベリア抑留者でも、その五万人以上が寒さや飢え等で死亡と推計されている。惨禍の大小、直接間接を問わず、戦争に纏わる不幸が数え切れないことは論を俟たない。今は亡き両親もまた、筆舌に尽くし難き過酷な体験を強いられたわけであるが、それでも常々「我々はまだましな方や」というのが口癖であつた。そして父は、捕虜生活に関する母や私の問いに、

殆ど耳を貸すことはなかった。また、同様に抑留の憂き目に遭った人々から、何か償いを求める活動への参加を勧められたりしていたが、左手薬指に目を遣りながらも、「思い出したくもない」と一顧だにしなかった。

長じて私は、永らくサラリーマン生活を送ったが、その後年、単身赴任の海外勤務の打診を受けたことがある。そもそも内示制度など無き会社であったが、当時すでに認知症の父と、全く光を無くした母を抱えた私の家庭事情を勘案してくれた役員の話りで、特に事前の打診となったのであった。その海外勤務の後の処遇も約された有難い話ではあったが、私はこれを謝絶した。役員配慮に悪乗りするように内心忸怩じくじたるものがあったが、両親の病状をその理由として断った。しかし私には、他にもっと大きな理由があった。すなわち、まだ幼かった子供達を前にして、かつての『父帰る』の記憶が私の脳裏をよぎったのである。その頃の父は、よく無意識に「ダモイ」（帰国・帰還の意のロシア語という）を口にしてきたものだ。

父の原爆死

和田三千代（天王台在住） 一九三五年生

昭和二十年八月十五日

私は十歳、小学校四年。広島県甲奴郡領家村こうぬぐんりょうけそんかめだに亀谷という、岡山・島根の県境に近い中国山地の父の生家にいた。布団には父が力無く横たわり、心配そうな顔をした母がうちわで風を送っていた。当時、家のラジオは、東京からの疎開に耐えられなくて良く聞き取れなかったので、前の家へ「重大放送」を聞きに行った兄が「日本が負けた、日本が負けた」と、泣きながら帰ってきたのをはつきりと覚えている。

私は東京で生まれたが、いよいよ戦局が厳しくなった昭和十九年十一月に、母方の親戚のいる埼玉県熊谷市に預けられた。そこに二十年三月までいたが、その間に東京大空襲があり、仕事のある父を東京に残して、家族は広島県に疎開したのであった。

父は当時、陸軍経理学校の国語教官だった。万葉集などの研究をしていた学者でもあった。が、経理学校の新入生の試験官として広島へ行った。本来は九州への出張であったが友人に代わってもらい、私達の疎開先に寄って、八月五日広島へと向かった。人の運命は神のみぞ知るのか……。

永井少将閣下

佐々木 一二

広島市に於ける戦災罹災状況並に爾後の行動に関する報告

昭和二十年八月十日

陸軍教授 佐々木 一二

陸軍経理学校校長 古野 好武 殿

第一 広島到着 宿泊

八月二日 善通寺検査場に於ける検査を終了、五日迄に広島に移動すべき計画なり。

宇高連絡船の故障を顧慮し可成速かに四国より本土に渡ることとし、佐々木教授は八月三日朝、高崎少佐、沢木見習士官は同日夜善通寺を出発せり。然して広島市の危険を顧慮し、直ちに同市に入らず、高崎、沢木両名は河内附近に、佐々木は三次附近に待機し、八月五日夕刻迄に相前後して広島市に到着、中国軍兵務部と電話にて連絡。かねて同兵務部の設営しありたる同市鉄砲屋町神田旅館に宿泊し、翌朝六日九時、兵務部にて細部の連絡をなすことを打合わせたり。

第二 八月五日 夜の空襲対策

八月五日 二十二時頃、警戒警報続いて空襲警報発令、直ちに三名は軍装を整え、書類の保全上最も安全なりと思惟せらるる西練兵場に退避し、警戒に任じたり。

当夜は広島上空を行動せる敵機は僅少にして投弾のこともなく無事なり。六日〇一時頃に到り警報解除、更に六日〇二時

頃警戒警報発令せられたるもまもなく解除。

第三 八月六日の空襲状況

八月六日 前夜の警報にて整えたる軍装を朝に至りて解き、夜明けより若干仮睡せり。起床、朝食等型の如し。

○七時三十分過ぎ警戒警報ありたるも空襲警報に至らず。○八時十分頃解除さる。故に兵務部に赴くべく軍装を整えんとし、高崎少佐は居室二階八畳の縁側に立ちたり。佐々木は同室内に於いて襦袢じゅばん注17。ワイシャツ袴下こしたを着用したり。沢木見習士官は自室にて寝衣を脱したり。

その瞬間、白色閃光とともに爆風襲来、縁側にありたる高崎少佐は「アアッ」と言う叫びをあげたり。同時に一瞬にして家屋崩壊し、その下敷きとなる。爆風襲来の瞬間、一種脳神経中枢を刺激する如き名状すべからざる不快感を覚えたり。倒壊家屋の下敷きとなり全然の暗黒裡、高崎少佐を連呼したるも応答なし。よつて全力をふるつて脱出を決意し、身辺頭上にある柱、梁、壁の障害物の除去に力め、概ね十分間にして屋根上に脱出し得たり。更に高崎少佐を連呼したるも応答なし。続いて沢木見習士官を呼びたるに倒壊家屋の下よりかすかに応答あり、到底脱出の見込みなき旨を告ぐ。よつてその所在位置とおぼしきあたり、瓦石、柱、梁等の除去につとめ、漸くにして同見習士官の所在を確認し、わずかに障害物の間隙より引き出すことを得たり。続いて書類を格納したるトランクの位置を発見せんとつとめたるも発見し得ず、刀、軍服、鉄帽、ずのう図囊等の軍装品に至るまで一つも発見し得ざりき。

時既に倒壊家屋は火を発し、小官等所在位置の四囲を包圍して火勢猛烈なり。ここにやむを得ず書類の搜索と高崎少佐の安否確認とを断念し、負傷せる沢木見習士官を扶け、猛火を避けて現場より脱出することを決意せり。実に断腸の思いに堪えざりき。

思うに高崎少佐は爆風を正面より受けたるものなれば、当日の一般に見る如く全身に火傷を負いたるものと判断せらる。而して二階より階下地上に転落し人事不省に陥り、小官の連呼に対しても応答することなかりしにはあらざるかと思惟せらる。

同日の空襲状況を其の後各方面の実見者、体験者の言により綜合するに、同日朝警戒警報解除直後、敵三機高々度よりエンジンをとめて空中滑走にて中高度以下に侵入、各一個の落下傘付き爆弾を投下して急速避退す。まもなく相次いで三個の爆弾は炸裂し、広島全市並に近隣町村の家屋を一瞬にして破壊倒潰せしめ、戸外にありたる人に火傷を負わしめ、家屋を焼夷せしめたるものにして、従来行われたる如何なる空襲に比するも全然の新兵器を使用せるものにして、その爆弾の威力は極めて大なり。その破壊力は爆撃の中心地方に於いては勿論木造建築物を一瞬にして壊滅せしむ。

倒潰に際しては地震による場合の如き上下左右の振動あらず、真上より一挙に押し潰さるる感なり。広島城、大本營等をはじめ大建築物一瞬にして倒壊せり。尚その焼夷力も極めて強く、爆風に直接ふれたるものは必ず火傷す。西練兵場の広漠たる現地自活農園の甘藷は一瞬にして地上には何物をも留めず焼却し尽くされあり。その他街路樹、庭園樹等延焼によらずして焼夷されたり。市附近の稲田の焼夷せられあるもの少なからず。

第四 佐々木 沢木の行動

現場を脱出せる兩名は火災を潜りつつ地方民間負傷者を扶助しつつ避難し、一路広島被服支廠ししやうを目途として進みたり。京橋川を鶴見橋によりて渡河し、比治山を越えたる所に兵器補給廠の救護所あり、ここにてはじめて治療を受く。佐々木は臚ろ頂部打撲、顔面、右手擦過、右足打撲擦過の外傷あり。沢木は左眼瞼裂傷がんけん、左顔面打撲、左足打撲の外傷あり。応急手当を

受け、且つ洞窟救護所に收容せらる。この頃より猛烈なる嘔吐を催し、且つ悪寒を覚え発熱す。十六時トラックにて被服廠に運ばれ、ここに佐藤支廠長、宮崎先任将校、平田大尉以下の絶大なる御厚意にあずかることとなれり。

症状は局所の疼痛とつう以外猛烈なる頭痛と発熱、頻発する嘔吐、食欲の全面的欠乏なり。

第五 兵務部との連絡

七日、佐々木尚病褥びょうじょくより脱する能わざるを以て支廠の好意により将校を派遣し、兵務部との連絡をはかられたり。然るに中国軍司令部の被害は想像を絶するものあり。首脳部以下多数を失い機能殆ど停止せられありたり。兵務部の所在位置すら判明せずとのことなり。

この時学校に対して第一回の電報報告をなす。

八日、佐々木病褥びょうじょくを蹴けつて軍司令部に到る。兵務部は部長、高級部員はじめ多数戦死し、招募主任堅田大尉また亦戦死しあり。且つ、残存将校以下も屍体処理、重傷者救護等に専念し、定位置にあるものなきなり。之を把握するに実に困難を極めたり。

幸い一中尉を発見し、この中尉の判断にて参謀部と連絡す。参謀部も多数の戦死者あるも、軍司令部各部にては比較的残存者ありて、同部の意見として「この情勢にては到底予定通り検査を実施し得ざるに付き無期延期と致したく可及的速に軍司令部の陣容を整え、検査再開に向かって努力する決心なり何卒ご了承を乞う」旨申さる。

次いで司令部附近作業所に於いて、面識の兵務部招募係下士官山本軍曹を発見す。同軍曹よりの通報に依れば、松江聯隊れん引率官が受験者を引率して某地点まで到着、広島の被害を顧慮してそこより单身連絡に來たるに遭い、検査実施不能の旨を告げ、現在松山放送局が活躍しつつある現状を以て、これを利用し、又他のあらゆる手段を用いて、他聯隊区へ周知方努力

せられたき旨を委託したりとのことなり。(六日午後)

その他聯隊区引率官にして兵務部と連絡し得たるものなき由。

小官が兵務部員捜査途次、受験者二名に邂逅かいこうせり。二名は最近鹿児島西部十八部隊に入隊せるもの。一名は広島県下在住者にして共に明日の受験の為の受付届出をなさんとする者なり。故に独断を以て携行書類を受理し、野外に於いて假口頭かり試問を行えり。若し改めて試験を行う場合に於いて再出頭の通知あらば出頭すべき旨申渡し置けり。

第六 書類の取扱並に焼失について

書類の保全に対しては万全の用意をなし、善通寺検査場の判定の如きも、原本の外に副本二通を作り三者各一通を所持して万一の場合にそなえる如く用意し、又広島関係書類もその安全を期して広島市への搬入を極力遅延し、且つ前夜の空襲警報時は安全地帯へ搬出する手段を講じ、当日兵務部へ保管を委託すべき直前に於いて事前の配慮を一挙にして無効ならしむるが如く、全書類を集結罹災せしめ且つ手段を講じ、努力を傾注したるも、遂にこれを焼失せしめたるは、採用業務上至大の困難を誘致したるものにして、すこぶる遺憾に堪えず。

責任の重大に恐悚措おく処を知らず。

第七 高崎少佐の捜索

高崎少佐の消息に就いては、極力関心しありたるも、結局生存しあらば当然聯絡せざるべからざる軍司令部への聯絡の事実もなく、且つ罹災現場附近の猛烈なる被害状況よりして戦死したるものと認むるの外なし。然して八日に小官が、九日に

支廠平田大尉が罹災現場附近の捜索に任じたるも、遺骨遺品等につき何等確認すべき物を発見し得ず。誠に遺憾の極みなり。

八日学校に対する報告第二電を発信す。尚同日佐藤支廠長東京へ出張につき便宜を以て経校への連絡を依頼せり。

以 上

× × × × × × × × × ×

八月十二日に私達の疎開先に帰ってきた父は、額に包帯を巻いていた。梁に打たれた跡だと言った。その夜「もし地獄というものがあれば、今回の広島のようなものだろう。皮膚が焼けてぶら下がった人々が『水…水…』と町をさまよっていた」と語った言葉は、その後何度も私の夢の中に現れて私を苦しめた。この時父の話を一緒に聞いた母、長兄、次兄は既に亡い。

この報告書はたぶん途中で終わったものである。父は力尽きてこれ以上を語れなかったのだと思う。父は臨終の床でふと目を開け、「今、東京へ行く列車に乗っていた」と言った。自分の死を予感して家族のもとへ帰ってきたはしたが、この文にもあるように責任感の強かった父は、最後まで学校へ帰らねばならぬと、思っていたのだろう。

長野県上田市に「無言館」という戦没画学生の美術館がある。もしこの画学生達が戦後を生きたならばどんな絵を描いたであろうと、込み上げてくるものがある。涙で絵が霞んでしまった。そして、それは父への思いにつながった。

昭和六十一年に不思議な縁から陸軍経理学校の同窓会に招かれたことがある。父の教えを受けたと名乗られた方が、万葉集のうたを三首ほどすらすらすらとおっしゃりながら、「佐々木教授の授業は楽しかった。私達の学校は教養を大切にする方針があったので、あの戦争中に万葉の世界にどっぷりと浸らせてもらえた。心のオアシスだった」と言ってくれた。父

は戦後を生きることが出来たら、あるいは研究成果を残し得たのであろうか。

多くの若い生命、誠実に市井を生きた人々の命を奪った戦争だった。二十一世紀は何としても平和であらねばならない。

（我孫子市消費者の会編「戦争の記憶」 二〇〇一年三月三十一日発行）

前記の文章は、二〇〇一年に我孫子市消費者の会で出版した「戦争の記憶」に書いたものである。これが不思議な縁で二〇〇八年にドイツ語に訳され、ドイツで出版された「An jenem Morgen wie am Tag danach」という本に丸ごと収録された。今、英語と中国語に翻訳され、出版を待っていると聞いている。